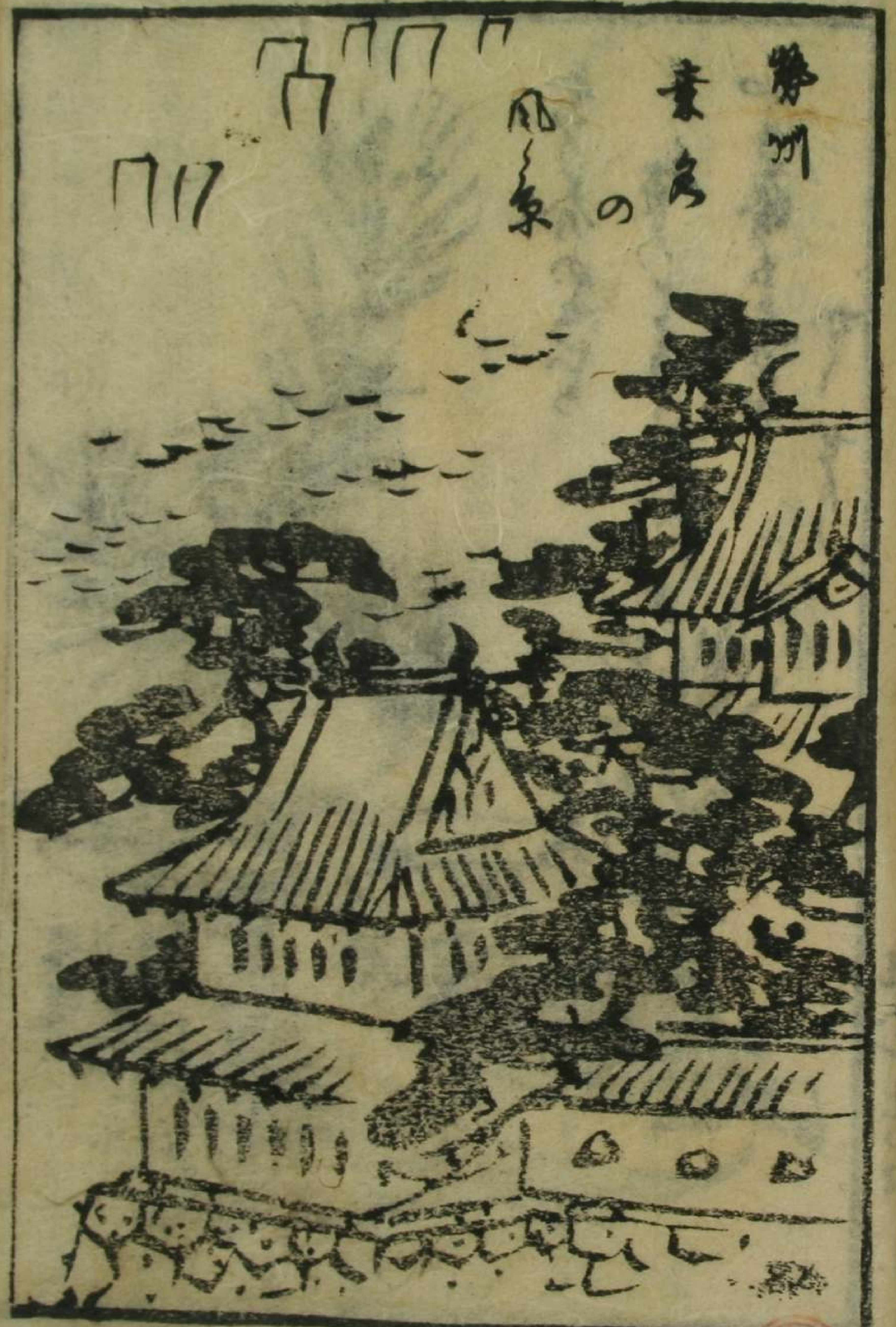
東海道中膝栗毛

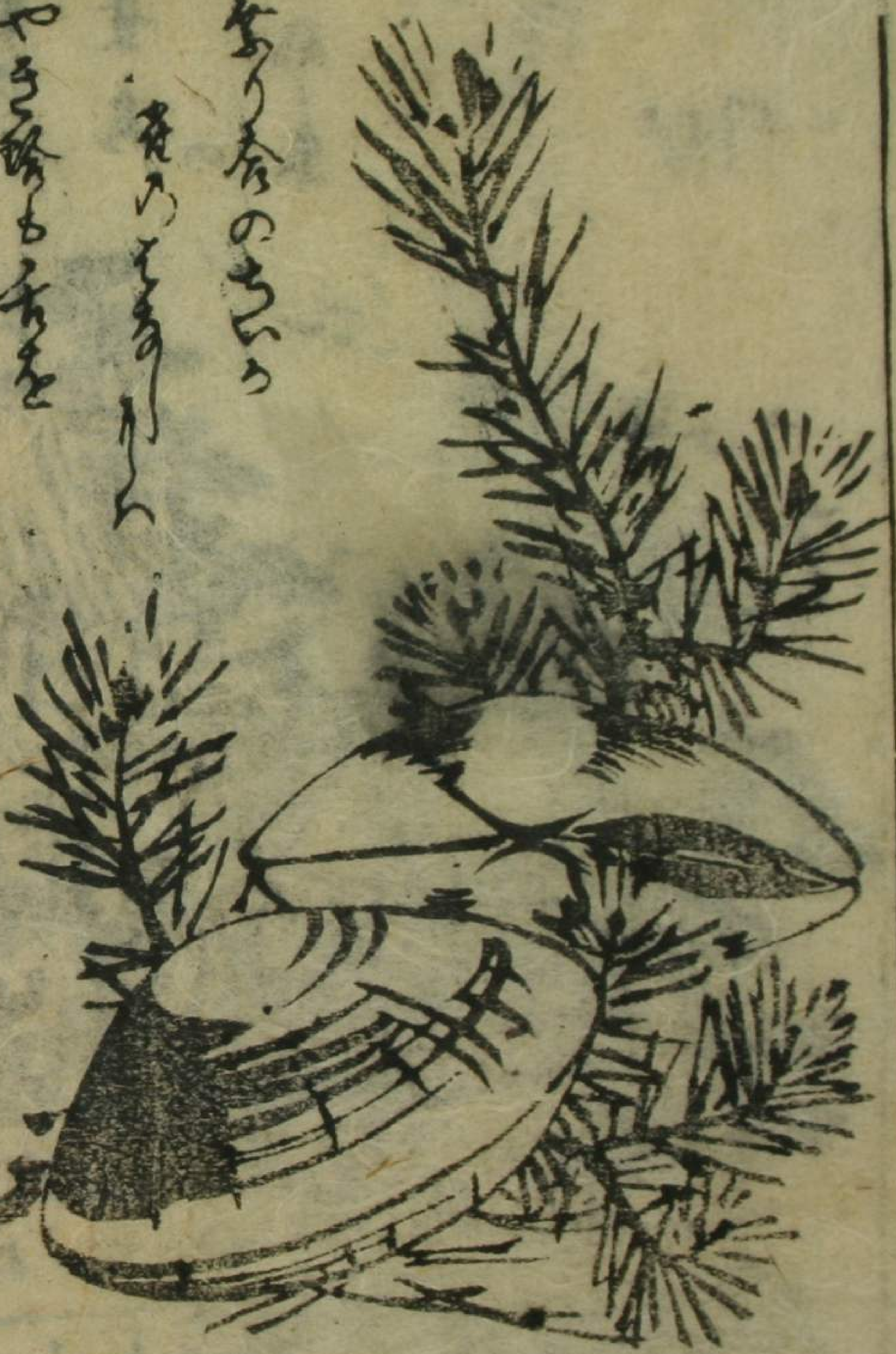
五編 上

特
へ遠13
1164
12



特
へ 13
1164
12

Okamoto



よりあひのちから
貝のまきりん
やき蛤も香を
かくせり

滑稽五十三駅五編巻之上

藤田村とおもひし東海道をまちかへしてるなる　謙亭林こ
ゆきゝしく男女大ぜいにてうしろまへにはしりあつまり
さるは何事やと弥次郎兵衛北八も行書けつく
ある駅にむかひて鉢モとく御こゝろやそおもてお
見たさのまへ十さんらいをもてまりの出女のお髪一子
天気のよきの藤薬師さまへ参詣へいてるほうしなるの
で今こそそこらをうつせるかな鉢八分あの様むかし人見

へいく　ト此内たくさん人おしあけくわりこみくる（さささと村の者でもあるのわりをおしあげ大ぜいにて）

三吉「なアまアさアく　すたくアしさあア　ゆそたく

しやア語へおやくまかろう　三吉「なアまアくア　孫「の

おめさをよりついて前のつらア見さらうしちゑの縁へ

つかせ　三吉「おんせんいて見く　是ハ海道の葬

（そけ白うくん）烟へ出現しさまふ玉の天蓋は晴雲師様御来所あるそぐ

のうんおくつもちひ男おけさらあ吉りまいり

すべく　おんりちいましてまあそのわけさあと

中くさで三ぜんおどろくますと　孫「ソリヤ蛸どのがで

ざあくく（ト此内みなくはつまる中にしおもくハ大ぜいにて／くろきとふるあとよりまんぐんドの尚たけののりの）

（まてきさるト此うちにおあつまりつると／おるだぐくとも十浄んど種ぐんる）「おすみ　お十郎く　トいふとのり物を

（おろそこをくろうるのまをもおくまべおやすくハゆそこのかき／おろうぐかみて大おもさこひけさうけのてろうろおしやうさしもあろ）

だくらしく「なむあみ　「なむあみ　おやう「なむあみ　孫「なむ

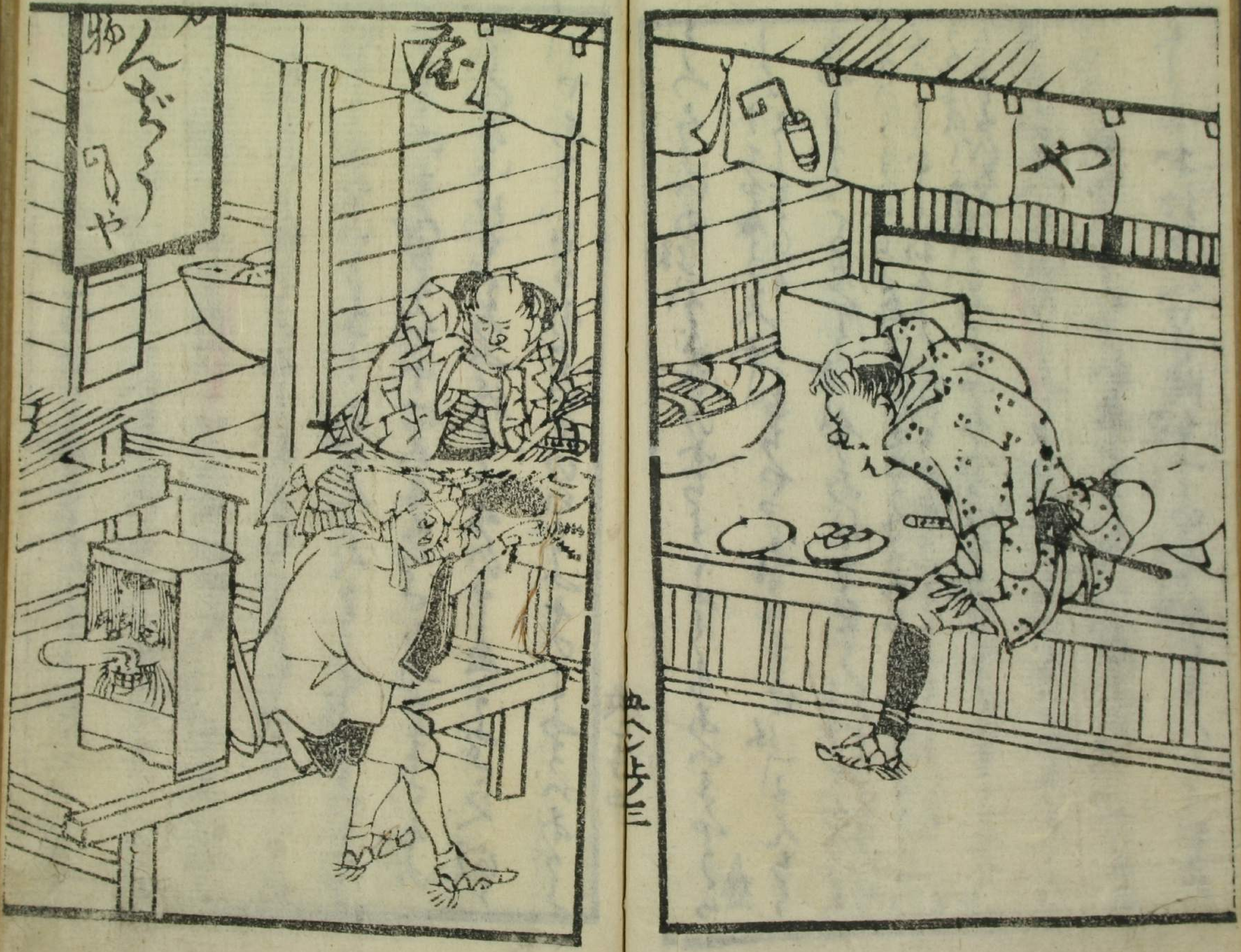
あみ　おやう「なむあみと　孫く十浄んの是非　おやう「ハア（どふしてこの世をさのおあがれくして）

くろ吉兵　トいふとさまく十浄んのあと追ひ　孫「ハアくく（これもくちかねまろくさらく）

吉兵　おやう小「くそとくく　孫「くそとくく　孫「くく

とんざお十稼んざアノおせうへいろゝ志やまさうち七郎
ごりしさる弥「なアまアぶアく　（トざゞめきわらふ弥次郎北八もおかしくおもひ見る）
十念（ねん）をうけ[illegible]のうけさせしれ
あつらしは風をひかせし
かくうちすぎてお與じわやどまちも追分（おひわけ）にいたり
ゐるは茶の茶屋まんぢうの名物あり　茶屋（ちやや）の女「お休（やすみなさ）
あそりまアせめいぶつまんぢうのめしとゐのどあがり
まアせおざうにもてうりまアせも北「表側のむきあが

ころゝいの北「うどやのはぢよくめしもあへきやうにら
いハトちや御座へ大女「おちやアおあがりまアせ北「まんぢう
うしきりける
も四つくれ見やう女「今あげませう　ト北ぞんまお（てきるこのうら）
こんぴらまいりと見えてめのとのさいくにしたる[illegible]
ぐうらおどとおしくろのちや屋[illegible]
ある端ひらまん[illegible]
ぢう志へ志やん「見つてやすいやうでもあるよおざ北
「イヤおまへも應風どもちんぴらでうけんにきやうし
こんぴら「あのきぐさアおまどうなお北「さやうさこんぴら「さう
くしもおゑどへうて時分（じぶん）丁の名物（めいぶつ）のまんぢうをたべ


御そばきりや
や

どくして二十八ならさまがござりましたが又ぐづら
ありのじや　孫「ようゑはそうらうが町内でもうまい
ますが茶(ちや)弟子が多いまねに六十ぐらいのくらい中で　ゑびす「その道はなかなか
いおすまいどれほどくしもまちずまいでゆちがしまじかせ
ばかりなまをいわるまじみせんさべましそ　孫「それはちやア
今までのまんぢうを十日ほどもならさるがまへぞその
ときはいけなれる孫ならくらいさぬようござりそ　ゑびす
「イヤまあしてるおまへはりの外よりよそのよおまへおがる

まいやうそもまん十日ほどもあるであやア笑の山で　孫「十二ま
ござへまも　ゑびす「どうしもうくあおさる口ではみよおい
しゆうがそのよおまへはへぬりのじ中で　孫「十二くへ孫へ
しがあるりのござあし續(つゞく)ぐりしらくらい中で中ぬが續(つゞ)ぞ
くらいせらしとまづくいくししでまえなまを　ゑびす「コレハ
おりしるいはモシ意地(いぢ)がわるいなんとまくしのお振舞(ふるまい)
やませらるそもそもまぢなけおらうくはらうじまらせ
ぬう　孫「くらいやせうとも　ゑびす「りしほうしぬとおあさの

おさとまじやがよみこぶりまするぞ　孫「それもやあまさ
てくさ（トクはのつくまんぢうをもつてもくひかゝしが十ヲ
むかうへやつておとゝいのおくびやうかどかおのれ
えんぴらとなあつてやんと）こんぴら「コリヤ　たかしぬそしらく
（ひりえおしまゝみこつてまちよ）
あつくまくらいのおんまうせぬ　孫「ぼおめへもやつぱしで
見なせへこんなちいさなまりのはいくらしでもくらはまろうえんぴら
「イヤそんならまへりまやぬちしかくしもおやかに紙
入まよ十ヲそろうべて見ませう　ほ「十二十ヲずつは二十
くひなせへそのかはりひとつものとさんぐらひまそうさか

らばまんぢうの代はめい〳〵ごん郎ま百文今晩拝ませう
お紺庵とあげませうえ　ごろうやありがたいてんやの
へい先刻で見ませう見てば　トまちう二十とりよせてすくと
ぶつうく十ヲもつらへくるそのうちるがめでくひくると
めらうくとのこらずむきく（おなかしいやでめくらとこうて
あやま張ばる夫へはあそびがちがひ）
孫「コリヤおそまろく　えゝ「おまへそくのとうりまん
おうの代はさしいつくおなうとの百文でもうませ　孫
「今あけやせう春しあんまり見ことぞかうりよ
二十くひなせへ今夜へは　そうと二百文あげやせう

そのかはり二朱とる　ハ弐百文とりつぎかどで
くゑんびや「おすしあげく　一切の砂糖漬のさらまで出る
て見まする　銭すぐく銭　ハ旅籠ぞおん人も弐百ずつ人
出しておまへ　十銭ひく三百文なら　しかんでも今としまる
おかみとの百　文さげを付けくとるゝたりよ
もやりすゝめ出入とおもひえ　でまんちうをまぜく二十とりまさ
てんがみさしめるやらうや　ろひゐうんのくもあくちら九
ろうく出まひまだやくの　ゑに　おまへありがたんまんぢう
三百文をちやでかくして
の代もよろしう　おさのいやまもハレしおすみへがゆゑ
おざうきまあづかりまして　ハイ申ますと　こまて　下お

くらとやみるおいでまするも見そして　出べハしし大きうえんなこと（おそげうおま銭ひくハわきまでさきまさ）
ふあらふたおまへく　銭「いまく　しんやよあれしやアなか
さそしめの百ヶおししなかつく　うんのうをしてこう
そくるね　ト目出度すのうそう「ゑんなうくん　おかたらいてきた（ええうまくおちくもうて）
てまぜめる銭りと　おしやア銭へやらひめよあつく内
んちうのくひろうとさして　銭三百くゐとらしまさくうえ
「ハア今うのゑんひうめしやおてらぬあおうハかとふうと
してあうにあるかアリヤ大ほの茶もよいよなうハよ

つまつかひしやうなるまんちうも娘のおそゝけちの会
くらべて七十八ちやうなるさと大分く淫は人まれなるべし
りちよハまんなたりし人さへしひろんでうせあつくと
いふあまりしやつほ上於も一ちくはそめうまいうち早くあるく
けもゑーのうちのをまいらのまちもりこへまんちうをす
三ッ巨ゥつてしまはりちでくらいなかなるハイ且
刃なめけまのつまは淫かうしや寸コレよめくさちや
ヲそのまんちうを雅ましりつくいは ハイコリヤてつの
あよもろんひらまい子の人の段のう半もくま

まして孫「そんなにあらめかゝつたと見せやア
がつくおいしをさゞぬくうかまやアがつさいはまく
しいぬつけくぶちのあそよう中「いくりなおいしくも
飛気くゞらんむしで中りなせんゑんなそうちがま挟
ざうしよりくく孫「そまごとうくあんまりごろうが
ゆへかへゞ中「ゆめくの酒りでおまをなしハウヰ合せて
そのむうひぶとおすひすせんあんまいくごうさしざ
逆入り避がおきうやまんぢうの

かんのおつかり 狐尾もしまして
孫「それおもしろくも孫へ志ゆまもせんなもうしくまんぢう
代いいくらじや 孫女「ハイまくのさしじやメてて貳百二十五文
でおつきりまする 孫「せうもが孫へ よいせうくぢや「兵部
まんおそしまめそくめしてくださりませ 孫「いやく
うどんうき「酒でまつてませう 孫「そんな酒とのむらうど
「ハイ酒いそうで一本ざけをもそうりまする 孫「まして酒の
のミつくらう志やまとおりつくうのへいゆかく サアおハ

出かけよふトこれよりいせさんぐうしちくさる
孫くせや伊勢と越のてうまるなる追分の建場より
左りのうくの町をとるまでて野路をどう行ほどくよ
むらかよう事農作のちやまよとのり志てる男かん
ぞうデ公まても「見てゑめくとそるをヨおりくと孫
アレやナろくなそうめのとの一まん孫つきよつんめげくア、
アくく丑 孫「コウ見さらしアノ向ふのつくくるる金を
おろして見せよふかトふくざしとくろくめ出して

ろうよりらそくへるてつそ見世のけてく弥「ナントどふだく扨爰ふ
ゆくところくさ出てくるよりおりそれようよ
このりの「ぎんのとあつまよヨいそとそ男なさなんぜい
亭
きゆうぬ裸（ちぢら）ぐおうされあいつまよ久ちらし 丑 弥「どのつ
もおろして男らう丑へ二丑「ヒツく トふわつまうろく弥「小 おりとく行るる
八どふだきめうり小「二たぎしを見ると紫折（のりうら）のでき弥
へこさアこゝを志うてぬしア弥「そまでうしよおまへを
倚（きみひ）ざとおもひおつく小「出だろアのかぜおとを見なせへ
待ざふさうろうろ弥「是であんまろトふりえるひ留しよろのお倚まだろうり

弥「ハイ是へは御めんなさんせ中へ御戸（ゑど）へへいおふどく是おどくぐ
さりゆうちる此さふひし白いは此んの名主さまへ「乞」むさの詫（つき）りく清つこそ
らくあがりせるとりよ宿（さんまう）もあしがそよるる弥「ハイ御
つまがてふてくう中七中「つきかうそくへおがまさっあ
んのうぐ蝮（うわばみ）がてんじゆう志やア志おへしかしい門
この門ハ何といふ門ぞ猩々（ちうじん）の描絵（そしがえ）が式文ツッ出ますぞ
此門を字（うつ）べ紙（がく）門といひますぞ弥「ツレ式文ツッ四文よ
撥素（やけまい）りなしべがきをもようべ門

こゝし北八もかりだしおしく
それより黒川(くろかうがは)とうちまゝりそゆくも神戸(かんべ)の
しゆくにいたる入口に宝珠山火除地蔵尊(ほうじゆさんひよけぢざうそん)あり

安穏(あんおん)は火よけ地蔵の守(まも)りかん
夜(きう)のおつきも急(ふる)乃神戸(かんべ)も

かくてこの宿(しゆく)はづれなる茶屋(ちや)によりて中をとく
いこふに 亭主「モシおまへがたアおかまはのつくらんさん
う 弥次「いうまいねずりみのたべん 亭主「上郷(かうの)までねぐる

おまじやアこゝ銭をつけく銭百文十ぶんせ 北「三ツ
くらうどん百五十文めぐい 亭主「ろくろ拵(ろく)をりてえんまへ
の壹かうらくのを三里の和(わ)ドや白子へまわり給
出門くのつくいうんせ 弥次「ふくうのしまみやアいつかず
亭主「そしてくおかくうしくもおかま(かる)の鉄(くわ)へくしつけて
どうあんかけ縄(なわ)で志めたまやきぐりひれあんがゑ 北「と
んでそらふそまやアたぞこものまいぬ 弥次「こん
なうかりくのろふが百五十でかふか 亭主「まふくはらし

中らのしまきよ（トうのそうぞんでさそふてうの前を跡つけ以前からまがり如八がのつく歩ける）「おらア
そろ／＼さん／＼いくぞウレ如八右のあら／＼へうしじよふぐ
る十「ヒイヒく（まぐのかくの）「あるんヽく（此内むかふよりきたるおとこんじんのせんどうしくろいし）
まわりをさそせずまはいずろりさしくるのふろしきよつて「ヒヤア
きくる引かけぞろりグけまく本りるのる主と見つけく
の主しやア上許の長をじやあいか今の主しがくしとく人杉くい
庚りしやなへとまでいさおあさ（るうて長を）「ハア権平以
さあかうまコリやさもうしやめんおくがるいがあ「おろ
まんくおくうえづかなへるへ晦日くまいてとぞうを

まんざびく残まき文もいとさんがるどふあまさるのどや
ウレ一ぶとつん る主「マアくるちく来くわんせ（此る主傭さんのと）
（いうとおへてうのおよこを日あくりのしんへくるんへ とまおひおのまでもむよまゆりくとろしろうけて）「あるまいふ
でうみ卒しかへてぐぶんをなマアるくへうけさんせイヤ
そこの猫さあへ犬のくそがあるまあおいでるとあり
おつくろそうちしておこりのコリやく権平ぬべちや
まとあげんろ猫りあてるひとい不しやがてろいへ大道
あうでそまでもでけぬくいわ「コリやどふきるろやめ

ゐかゝ亭主「ハテせわしなへちくまんせいんまでごいじのおこしやがあるさかいマアこらへてくだんせ当年のみかのうちのかゝめが病気とこづいておつくかうたなうひせわしなへまろ雑役ふさん出やせんものとゆじやろくこうしてゐんせ日々日のうちこゝではゆつくとこちらくめせいそがるぞん「イヤおまちなんこいそれよいふてもよいてしやもよまへがるでん大分在なくものも一年ごしとゆふものゝうし織じや利々利がうらく二千ぞん

あるりとゆふもんじやものいふてなくそのかわりあのおまをとそいふてさかいハテまあさかの婦いのしがおまとこゝそと注文ふかうこじやないかそれくらいへぶんありや志よまへがるサアくりおまのうへる出歩をないんまさんをとふるじや御馳走のかわりに清よるおまじやどふぞてかゝおりきんせきのどくなかう弥二「ハアおかつもさうきまうか志まうくておあんざひよんなるまのく合せさいてうちのふ仕合せ

志かしまづ銭を出さぬ先にのませと油断なく

ドレおりくれやせうか（トかのぢん平は銭をとらせて ちろりおもると手にうけさう）ぢん「モシ旦

那おまへがおりそくゐるのおかまをとくと見るマアのぞいてみ

てかんせ ぢん「イヤおかんさい 小まさ「ハテとなへふもさるうへ

の旦那をおろしてんさのどくなせうくりしてかんせ

小「まそのるのちつりたのむぞ（トちろり八文ちろりの上六枝 平四郎さしとかりてく）

ぢん「コリヤくせをどふもちろのじや旦那おりくかんせ

小「ヱヽ又おろそのウイヤをさ気ゐちやアおまをいてね

さんざんおろしてりあげその足もとへもく

びまえそくさ ぢん「それじやさうしよかおまじやどうぞそふ」

おりくくださんせ 小「すのでめんどふなゝくつし（トむだれをもてなおり）小まさ「さて

根おさんせざくよふへがすまヨ」甚平それをうけ」てくださんせ

すこしも途中じやしよてもがきんせめく目へいぬまへ

まつてくださんせそのかわりこゝでけぬのをそこまでる

ぢん「そりやしいんでつけ流けるか 小まさ「いまいまあへ出ア

旦那めさめぬうへ ぢん「十二文のまうりまんそくにれおしア

きまつてあるんでゆゑあんまりせつくへ銭を出して
ものだてへアイやだ　ろ主「そまいゑんせぞとのつてたん
せりふがなサア〳〵　トろのくちとりてもくむりゆゑらく〳〵八　又をそしあしろまのまゝぜん半
「サアやくの布子（ぬのこ）をぬいでまゐりろ主「イヤそれならなへおゐいよ
さいのくこともうちへいぬげどまつくたんせ　ぞん「イヤ
おのまゝのりやうかんおんまゝサアく此形（ずなり）又おりて
らぶんせ　ずん「そてこの老人ふしろ又むかしからとぬりしやア
ずゞうりよいやくサアそへせてやう縫へかどもみもやアずる

のぞ　ろ主「ぞんなそふそうへのおろまぞもとんよ　ぞん「イヤお
ませてく居へさんあんでめつそ　トまつくるよあつきるとうつきまりかゞをろ主つきの
けくろの布子をおりゐあかくさくてあいらくさんよ「ヤアイ〳〵
みけ出せべやハうへまそまつらかよあつゑとあげそ
くきそけく〳〵まコリヤどふまるく　ぞん「ろとおぞしてそ
あんヲイ〳〵　トおろけりわ八をでしやうざんじよろのえく
ぞびあつるよしてくのあゝまおしゝろつろ「アいへん〳〵　りつてもろんやしくもよそをりゆゑさく八
まつらさの金よおちそこのくらそうち
ふしまぞそこてくまアイタ〳〵　トひつりかゞてそふすみむろい　よろ十二さんまろけりけどろ
「モシ此形（ずなり）おけずがまひるなドリやく　トほをとりておかてて　うらぞん半はへとしん

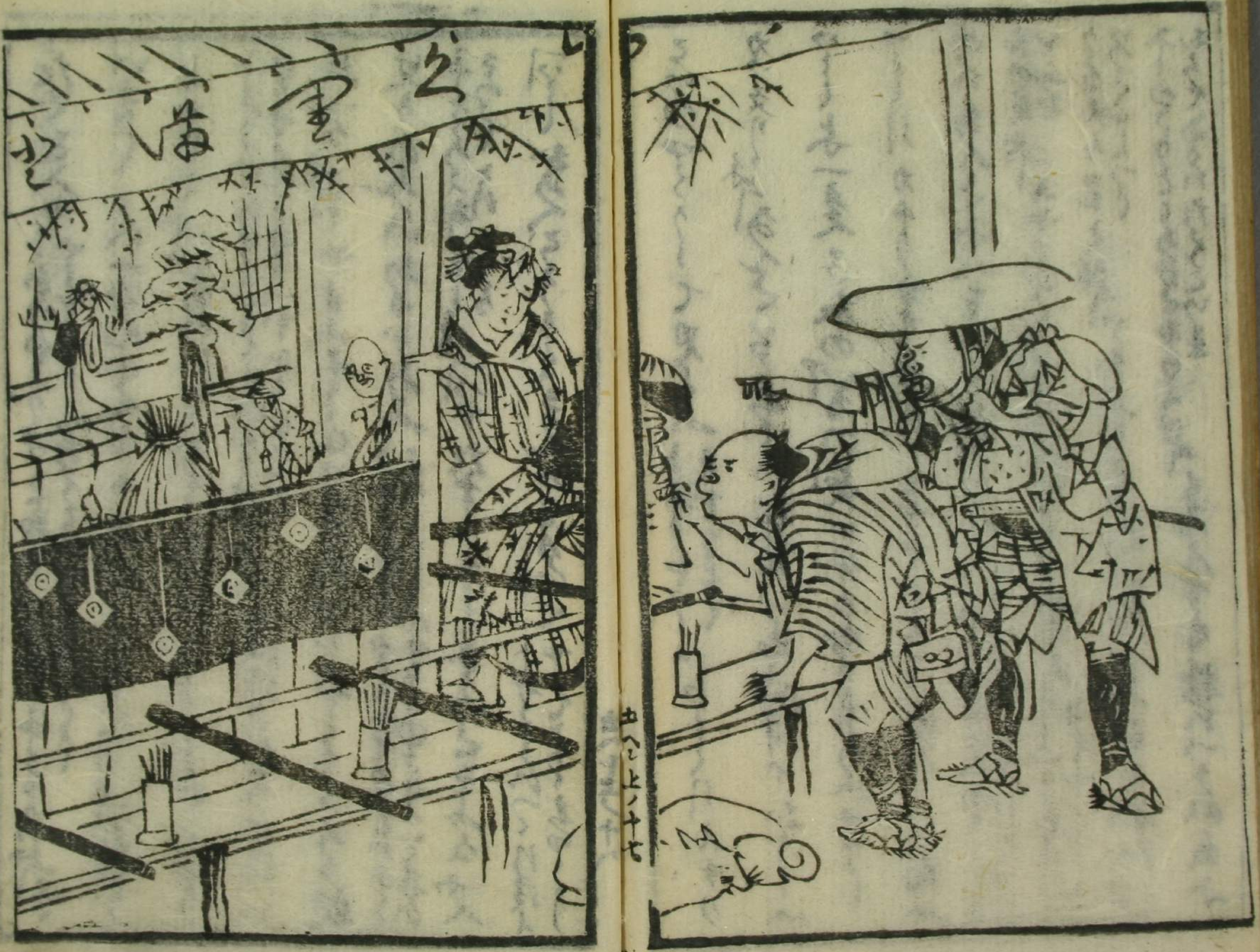
とうけめろゝろくされど見てなきなく小八「ヲイまちあづまお
さゝめと小八まうなのどうけさし七り　トうごくとらひなうしお
まとひとひのめまあひまやアグろくさおゝろえんさども
せんうくおくおゝろけんさえあしてごかいてさ思くの
なうらせふとしめくとうくしくとしてごりめほく

備後（びんご）とおもふあたりのあらせ
ひんまうせどんとおとされたるの
ゆくやどうなく矢ださ村といふまつる縁ゝう主人は江戸（えど）
の宿（しゆく）をづまよりさいは来るとかくのるのいさくさとゞ
船（ふね）志うむせよおどさいゝおゝりまをとあうゞるまおるまひ

ここはまち合せのわたりなるがそれと見るより小八「ヲヤ
く小八そのおりはどふしたのだ小「イヤわれもそこまでも
おくぬとんざめまおくさ　ト三ぜんよりのいちぶあづかりとぞ
ぐ見ぐ縁ゝおりしくさいはひの雨へ
かへるの様みゝうちゝさきありと
きして縁ゝ夫とりあへぞ
便（びん）な所なしと様ども千のいつさんに
おつかけてゆくかけごりの海
そこより玉垣をうちすぎ白子（しろこ）の町よりいそり[illegible]
天王をうしおりとつて子安観音（くわんおん）の前（まへ）をとをりゆく

風を孕む沖の白帆を紋壽の
かに濃でに思く海とそゝしん
その志ゆくをはるかく磯山とよべるに添くけふり
吹矢のいろくぐりつける小見世の親仁法策
と見うけく「サア〱おあぐさま〱思そんせ外題
ちうしんぐら十一だんつゞきソレふうんせヤレふうんせ
おおそなさるとうちまちゝうる彩板の上細工へ当る
どやく小八「ハアなんざ幼卒おゝる竟纏篝の核イヤ

ミつ思うして見よ〳〵トあまやつすよつしく川カチリ夫をいまく
カタ矢りし妹「なんさいなるへの松茸のまさすりやおうしい
ワしとよ一疋子なの罷の矢い的を出まるよつつし
つしく川カチリカチカチとヤヤみどしのるいしく白か
のいなんさ小八をかまへよりや トひきのけるひやうしにおしすし妹ていそう！
おの足大「キヤア〱妹「このちくしやうめトあきやのつまそふりしよ
とふむ
うる大をでと妹「アイタしうぬふちころさるトおつろくるを見
ならをつく
ホとのさりところけとそらさ小「とろんでも狭れへのぬ夜か
わちてあへいなくとりま



たゞと入りのトしのよりかと申よりほまわ子ともなり孫「子さ

いゝをそくとたゝく入さもとめとし

いまゝしん一ぜんそくらのまや アヂかく 子さま おわう

よわしや ころいてござりさまア いゝや ありがう

トおきやのせまをそへしい出かけるや コレ孫はさん又ひ孫ハ

むかふ又ごゆる一杯おちくさ言ぶ

ねへか 孫「イヤ 見ふきをはいらぬ アレあきらかる歌

又かひろいあるぶん トゆきちく みりの人見見ハあと

おとゝろまおまえ孫「あアたのまして見つくそふな 小八

きらくとけもまる るりまるおかちのきゝゆると思い

ひし おめへござりまするんかするへせ 男そ上の立申こう トおもいつゝひつて引きよ

いろ〳〵はなしのあとりの人と見へてそりでかちるも小もあうらく流

おつきそうおとこあとよりそれを孫はうまえなちかくさく

「亭主（ていしゆ）なかしあなさかでアお江戸でござりまする 孫「

「アイさ申さりの男「さくらの白妙（しろたへ）のされうしあなた

がくのおあしよつかくえんじしかちくのは狩衣（かりぎぬ）

とちゝりましておよりさなかし感心（かんしん）いたしまして

おりかくしてゞござりまん 孫「十二サ二本出かりうでん

でござり申せ 男「イヤおどろき入まして先生（せんせい）ては

戸の高名（かうみやう）を微塵（みぢん）先生など画名（ぐわめい）かいそくござりまして

孫「ハヽアそれはさやうく　男「あなたくの御弟子衆へ　孫「わつ
ちやア十返舎一九といふもの　男「ハヽア御高名うけ給はり
およびまして十返舎先生でござりまするか」
南杣の板元けとやかまもさそくよん和ぐおめみかく
まましくは夫は御参考でござりますの　孫「さやうさ
うのひざくり毛とや著述のみならつてござく出
うけまして　でおけ「いさゝかあまへ御出版ござりま
そ毛へおくしなさるもそくしも吉田屋名古屋

返へ御連中方御出会でござりましたが　孫「イヤ手前
どもハ宿ゟ咽らで。それがござりましても　まゐらうと。
ともかくましても然ゆう無ふありへましたらくで
ござりまするが東座の中にそまあん出鬼
のとおりまさと蒸籠とお氣にして世くり同気の輩
ゑうどうやうふん安くなんでも氣まませふ風雅を
寄と出うけましく　でおけ「そまへおいのしもでござり
まそまるく宅ハ雲ずでござりまそがどうぞ

お然らばしん弥「おあかしめしありがたふござんしてまた来ますよ

御縁（ちえんさやえんよ）を和の鉢中どなたもお引合せなされひらまれ

一宿（しゆく）とお寝（ね）がひ申ませうマアくわしぎる御縁（ごゑん）でよい

ところでおめへさまへうつて聞ますが小川とやらまんぢうの

めいぶつ一ぷくあがりませんか弥「イヤまんぢうは

こりやそこらぐにまつてませう（トおりまて此所を　ゆきさらぐれとも）

かの鹿（り）のうまん名代をとび人は

くひはせんと売（う）るまんぢう

斯くてほどなく津の町よりつゞきたるまへに雲出（くもづ）の渡（わたし）

左右（ざう）のながめ見ゆる石井風（いしかぶん）といふぞれなり

かまを板（いた）あそこしも纜（ともづな）のひまをぬすんで

これ細（ほそ）用媒（なかだち）が石井（いし）風（ぶん）うえ

滑稽（こつけい）五十三駅（えき）五編巻之上終